様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　４ 月　４ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３３９０

研究課題名（和文）明治中期の在野史学と文学の関連

研究課題名（英文）Relationship between History and Literature in the Mid-Meiji Period

研究代表者
木村　洋（Kimura, Hiroshi）

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：７０６１３１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：坪内逍遥は『小説神髄』で「世態人情」という題材の価値を強調した。しかし「世態人情」を重視したのは坪内逍遥などの実作者たちだけではない。注目したいのは、明治中期の歴史叙述という文脈のなかで、英雄や為政者の公的な事蹟だけではなく、その内面や私生活、あるいは人民達の経験をも記録していかなければならないという意識が生まれることである。そのような歴史研究と文学の関連を本研究は明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では、二葉亭四迷や尾崎紅葉のような実作者に焦点を当てて明治時代の文学状況を把握するのが通例である。しかし実作者という範疇に収まらない者たち、硬派言論人、在野歴史家、宗教家といった非文学者たちも明治文学史のなかで無視できない役割を担っていた。現に国木田独歩の日記には、田口卯吉、竹越与三郎、志賀重昂、内村鑑三などの名前が繰り返し登場する。こうした日記の記述に対応する、文学者と非文学者の言説が交錯し合いながら新たな文学状況が築かれていく様子を本研究は明確に描き出した。

研究成果の概要（英文）：Tsubouchi Shoyo emphasized the value of the subject of the lives of the people in Shosetsu Shinzui (the Essence of the Novel). However, it is not just novelists like Tsubouchi Shoyo who emphasized the lives of the people. What I would like to pay attention to is the appearance of the consciousness in the historical narrative of the Mid-Meiji Period that not only the official affairs of heroes and politicians, but also their inner life, private life, and the experiences of people, must be recorded. This study clarifies the relationship between such historical studies and literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：坪内逍遥　『小説神髄』　在野史学　田口卯吉　山路愛山　徳富蘇峰

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

坪内逍遥は『小説神髄』(1885-1886 年）で、1880 年代の政治小説の流行に対抗するかたちで、「世態人情」（市井の生活の細部）という主題の価値を力説した。それが刺激となって二葉亭四迷、幸田露伴、尾崎紅葉たちの新派小説が生み出された。

しかし「世態人情」の発見は、坪内逍遥や二葉亭四迷などの小説家たちの界隈だけに留まるだろうか。本研究が考えてみたいのはこのような問いである。こう述べるのは同じ時期の歴史書、歴史評論の動きを意識するからである。注目したいのは、この文脈で戦争や為政者だけではなく、庶民たちの経験や思想をも記録していかねばならないという意識が確立していくことである。すなわち「世態人情」の発見は、逍遥や二葉亭の界隈だけではなく、史界の周辺でも行われていたと考えられる。

２．研究の目的

1880 年代から 1890 年代は歴史叙述の変革期だった。その背後には西洋の歴史叙述との出会いがあった。この文脈で英雄や為政者の公的な事績だけではなく、その内面や私生活、あるいは庶民たちの経験や思想をも記録していかねばならないという意識が確立していく。本研究が解明したいのは、そうした歴史研究における「世態人情」の発見、およびこの動向と同時代の文学との関連である。

３．研究の方法

以上の目的を達成するために、在野の歴史研究と文学界の動きを追跡した。たとえば川崎紫山の人物論、『文学界』同人をはじめとする青年文学者たちの人物論、田口卯吉や竹越与三郎による文明史、山路愛山などの評論家たちによって書かれた文学史を検討した。またこの検討を補完するために、志賀重昂『日本風景論』（政教社、1894 年）、国木田独歩の作品、徳富蘇峰の評論も吟味した。一連の調査によって明治時代の歴史研究、史論、文学の関連を明らかにした。

４．研究成果

研究成果を以下の論文にまとめた。

（1）徳富蘇峰の人物論 ―「ジヨン、ブライト」『人物管見』『吉田松陰』

徳富蘇峰は「ジヨン、ブライト」（1888 年）や『人物管見』（1892 年）を通じて人物論という営みを開拓する。この試みは自由民権運動期の思考原理を相対化しつつ、文学的、宗教的な営みの感化力を確認し、喧伝する作業として始まる。そして蘇峰の影響圏から出発した北村透谷は、この蘇峰流の企てを蘇峰以上に過激に推し進め、政治に勝る営みとして文学を卓越化する新たな思想的見取り図を打ち立てた。

（2）風景論の移譲 ― 志賀重昂と文学青年

志賀重昂は青年たちに文学熱を鼓吹した硬派言論人として、徳富蘇峰と共通する役割を担った。とくに志賀重昂の『日本風景論』（1894 年）は、風景を眺める興趣だけではなく、その眺め方や美意識を加工する興趣を自覚的に追求した点で画期的だった。そして国木田独歩や徳富蘆花は志賀重昂によって示された風景論、つまり美意識の再吟味の企てを受け継ぎつつ、同時により非政治的な自分たちの世代の気分にふさわしいようにその企てを加工し直した。

（3）人生観の群生 ― 北村透谷以後

北村透谷の文業から、高山樗牛のニーチェ熱を経て、自然主義運動に至る展開は、「人生」「人生観」という個人的な問題への関心において一貫していた。さらにこの潮流に連なる形で、文学者の人生観を探る人物論型の文学研究も勃興する。従来透谷や自然主義者などの文学者たちの試みは、社会からの「逃避」として否定的に理解される傾向にある。しかし「人生」「人生観」をめぐる一連の展開を追跡していくと、当時の文学が統治権力にも新たな対応を迫るかたちで、社会的な諸勢力のあいだに対話や交渉を生み出すための装置として稼動していたことが見えてくる。

（4）徳富蘇峰の思想と文体 ―『国民之友』創刊前後

1880 年代に徳富蘇峰は漢学を批判し、また自由民権運動の思想原理に抗しつつ（それを部分的に受け継ぎつつ）、平民主義という主張を展開する。その主張の特色は慷慨ではなく、憐れみという感情に主眼を置く政治的実践を構想した点にあった。同時に蘇峰は自身の主張を斬新な欧文直訳体によって表現し、模倣者を次々と生み出すことで、この新旧思想の交代劇を華々しく演出した。そしてこの政治構想は田舎や故郷を意義深い文学的、思想的な主題として浮かび上がらせる。この文脈と強く関連しながら現れたのが宮崎湖処子『帰省』だった。『帰省』は蘇峰の平民主義の主張を発展させつつ、凡人たちの卑近な日常を貴い主題として発見する。この検討か

ら平民主義という政治的主張が写実主義的な表現の一つの母胎になっていたことがわかる。

（5）文明史から文学史へ

1870 年代から田口卯吉たちによって文明史が日本の思想界に広められる。文明史は従来の歴史叙述のありかたに抗しながら、知識人の関心を精神や思想の歴史に向かわせる。さらにこの動向に促されるかたちで、山路愛山たちに手になる文学史が現れる。そして日露戦争後に文学史言説は、『太陽 明治史第七編 文藝史』に象徴されるように、いっそう言論界のなかで存在感を持ち始める。そこで文学史は文学者を偉人化し、その伝記的事実への興味を高め、それを通じて告白小説の隆盛を支えた。

（6）女哲学者、平塚らいてう

とくに 1900 年代において文学と哲学は社会道徳や国家に反抗する個人主義者たちの精神活動の土台になった。こうした動向が、小栗風葉の小説「さめたる女」（1901 年）のように、哲学的な知見に支えられた新しい女性像を生み出した。そして 1906 年には哲学者風の女学生の過激な主張が話題を呼ぶ。1900 年代に統治権力や保守派論客が哲学を有害と見るようになるのもそのためだった。平塚らいてうもこうした女哲学者の系譜の一員なのである。森田草平『煤煙』（1909 年）では哲学的な思索を通じて社会道徳に反抗する平塚らいてうの姿が詳しく書き留められている。明治時代の思想界はこのように女哲学者の育成を通じて、自己を更新するきっかけを手に入れた。

（7）愛の帝国 ― 徳富蘇峰の出発

キリスト教が思想界に入り込み、西洋の政治を伝える書物が盛んに流通し始めた明治前期の新たな情報環境のなかで、徳富蘇峰は独自の政治思想を探りあてていく。この過程で徳富蘇峰はキリスト教の教えやマンチェスター派のコブデンとブライトの思想などを吸収し、福沢諭吉などの先行世代の知識人たちに異を唱えながら、『将来之日本』や『新日本之青年』などの評論で新奇な主張を展開した。そこで蘇峰は世俗に左右されないある強固な政治主体を鼓吹し、平民主義を説き、文学作品を意義深い資料として用いる、新たな政論のありかたを提示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木村洋	４．巻 37号
２．論文標題 「ポエチカルな俗語 ― 二葉亭四迷と民友社」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『上智大学国文学科紀要』	６．最初と最後の頁 161-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村洋	４．巻 68巻2号
２．論文標題 徳富蘇峰の人物論 ―「ジヨン、ブライト」『人物管見』『吉田松陰』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 31-42頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村洋	４．巻 13号
２．論文標題 風景論の移譲 ― 志賀重昂と文学青年	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語社会	６．最初と最後の頁 117-131頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村洋	４．巻 100集
２．論文標題 人生観の群生 ― 北村透谷以後	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本近代文学	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村洋	4．巻 20号
2．論文標題 「純文学の恩人としての徳富蘇峰」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『総合文化誌 KUMAMOTO』	6．最初と最後の頁 49-52頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 木村洋
2．発表標題 人生観の群生 ― 北村透谷、文学研究、ニーチェ熱
3．学会等名 日本近代文学会2018年度春季大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 木村洋
2．発表標題 「明治期の文学熱 ― 徳富蘇峰から徳冨蘆花へ」
3．学会等名 くまもと文学・歴史館記念講演会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 木村洋
2．発表標題 「精神的な開国」
3．学会等名 水俣市 徳富蘇峰講演会（招待講演）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 鈴木健一編	４．発行年 2020年
２．出版社 勉誠出版2020年1月、198-217頁	５．総ページ数 355
３．書名 『明治の教養』（木村洋「徳富蘇峰の思想と文体」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関